

看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究

加城貴美子 大江 基 陣田 泰子 國岡 照子 井澤 方宏
柴原 君江 竹内 文生 美田 誠二 青木 康子

要 旨

本学看護学生の集団の特性を明らかにする目的で、入学4ヶ月後に性格テストを行った。集団の特性を表す、TAOK (Transactional Analysis and OK positions)、YGテスト (矢田部ギルフォード性格検査)、POMS (Profile of Mood States) とSE (Self-Esteem) を実施し、その結果と各テスト間の関係を検討した。その結果は以下のごとくであった。

1. 「基本的構え」の自他否定している者は43.4%、自他肯定している者は27.6%で、自己肯定している者は40.8%、自己否定している者は59.2%みられる。
2. ピーク・エゴグラムで最も多いのはAC優位、次いでFC優位である。ボトム・エゴグラムで最も多いのはA低位、次いでCP低位である。
3. 「基本的構え」とエゴグラムとの関係では、自他肯定している者と自他否定している者との関連がみられる。
4. 本学学生のYG性格テストは、B型類型とD型類型の双極分布でC型類型が少なかった。
5. YG性格テストの理想自己と現実自己との比較では、理想像と現実像の乖離が小さい者ほど自己を受け入れ、自己を尊重している。
6. 「基本的構え」とPOMSとの関係では、自他否定している者は、「抑うつー落込み」、「怒りー敵意」と「疲労」のT得点が最も高い。
7. Self-Esteem は、通常得点群が約55%を占め、低得点群が27%、高得点群が18%である。

キーワード：交流分析 YG性格検査 POMS Self-Esteem 自己成長

I. はじめに

本学では、健康に関わる看護の専門職として幅広く活躍できる人材の育成を1995年度より開始した。学生は、専門職者になるために健康に関する知識・技術を身につけることは重要であるが、さらに人間を対象とする援助者として人間を総合的に理解する力を養うことも望まれる。そのためには専門職を目指す者として自己理解ができ、自己成長することは必要な条件である。青年期であるこの時期は、健康に関する知識・技術の学びの中から、他者との関わりを通して自分がどのような人間であるかを模索し、さまざまな課題を達成しながら成長する過程である。

本研究では、看護の専門職を目指して入学してくる学生が、どのような特性を持った集団であるのか、

その後卒業するまでにどのように自己理解をし、自己成長をしていくのかについて、追跡調査を実施し比較検討する。そこから今後の教育・指導の示唆を得ることを目的とした。今年度は一学年の学生の集団の特性を検討した。

II. 研究方法

1. 対象：1995年度入学生80名を対象として、研究に同意の得られた当短期大学の看護学生77名

2. 内容：①Transactional Analysis and OK positions (以下TAOKと略す) ②YG性格テスト (矢田部ギルフォード性格検査 以下YGテストと略す) ③Profile of Mood States (以下POMSと略す) ④Self-Esteem (以下SEと略す) ⑤学生の属性、職業意識について

3. 方法：各測定用紙と半構成的質問紙による調査

4. 期間：1995年6月9日～7月21日

5. 分析方法：各測定尺度の全体を集計し、各尺度間で χ^2 検定、t検定、一元配置分散分析を行った。統計処理は、汎用統計学パッケージSPSSを用いた。

Ⅲ. 尺度の説明

1. TAOK (Transactional Analysis and OK positions)

TAOKは、交流分析 (Transactional Analysis) の考え方に基いて作られた検査であり、水野¹⁾により開発された心理検査で、120問からなるリッカート・タイプの尺度である。

交流分析は、自分の性格上の問題点を自己分析によって気づき、他者との人間関係を自分でうまくコントロールできるように学習していく方法である。交流分析では、人間は「親」「成人」「子ども」という3つの自分を持つとしており、それらを自我状態と呼んでいる。「親」の自我状態P (Parent) の部分はCP (Critical Parent=父性的な親、批判的な親) とNP (Nurturing Parent=母性的な親、保護的な親) に分けられ、「成人」の自我状態はA (Adult=事実に基づいて決断する働き)、「子ども」の自我状態C (Child) はFC (Free Child=自由な子ども) とAC (Adapted Child=順応する子ども) に分けられる。そして、自分の中の自我状態がどのようになっているかを客観的に知る方法としてエゴグラム (Egogram) がある。また一方、交流分析では、幼児期に親との触れあいが主体となって培われた人間と人生に対する態度を、その人の「基本的構え」と呼び、人間は成長発達の段階で以下の4つの「基本的構え」のうちの1つを身につけていると考えている。4つの「基本的構え」とは、①私もOK、あなたもOK (自他肯定) ②私はOK、あなたはOKでない (自己肯定、他者否定) ③私はOKでない、あなたはOK (自己否定、他者肯定) ④私はOKでない、あなたもOKでない (自他否定)、である。そして、TAOKは、エゴグラム (以下OKエゴグラムという) と「基本的構え」 (以下OKグラムという) という2つの面から総合的に人間を捉えることによって、よりよい人間関係を営むために具体的に自分のどこをどのように変えていくのがよいのかを知る手がかりとなる²⁾。

2. YG性格テスト

YGテスト³⁾は、通常の12性格特性のほかに12の特性を因子群に分類した6サブカテゴリー、「情緒安定性 (抑うつ性D)」、(気分変化C)、「(劣等感I)」、(神経質N)、「社会的適応 (客観性O)」、(協調性Co)、「(攻撃性Ag)」、「活動性 (攻撃性Ag)」、(一般的活動性G)、「衝動性 (一般的活動性G)」、(のんきさR)、「内省性 (のんきさR)」、(思考的外向T)、「主導性 (支配性A)」、(社会的外向S)」を用いた。

性格プロフィールについては、典型、準型、歪型の15類型に分類し、さらに、A型 (A+A'+A'')、B型 (B+B'+AB)、C型 (C+C'+AC)、D型 (D+D'+AD)、E型 (E+E'+AE) の5類型にまとめた。

ロジャース⁴⁾は、自己と経験の一致を適応の条件とし、マスロー⁵⁾も精神的に健康な人は自己をありのまま受容できるとしている。そこで、理想自己 (Ideal Self 以下Iと略す) と現実自己 (Real Self 以下Rと略す) の差が小さい人ほど自己を肯定的に受容できると考え、理想自己と現実自己の差 (I-R差) を操作的に自己受容の指標とした。すなわち、12の各特性について、各個人の理想自己得点と現実得点の差の絶対値を合計した値をその個人の (I-R差) の得点とした。

3. POMS (Profile of Mood States)

POMS⁶⁾は、気分を評価する質問紙法の一つとして Douglas M. McNair らにより米国で開発された。「緊張-不安 (Tension-Anxiety)」、「抑うつ-落ち込み (Depression-Deject)」、「怒り-敵意 (Anger-Hostility)」、「活気 (Vigor)」、「疲労 (Fatigue)」、および「混乱 (Confusion)」の6つの気分尺度を同時に測定できる (以下、それぞれT-A、D、A-H、V、F、C尺度と略す)。POMSは、被検者がおかれた条件により変化する一時的な気分・感情の状態を測定できる特徴を有している。そのために自分自身の気分、感情に対する気づきを深め、周囲への対処方法を考えるのに活用できる。

POMSの質問紙は、気分を表す65項目の質問からなる。被験者は、その項目の表す気分になることが過去1週間に「全くなかった」(0点)から「非常に多くあった」(4点)までの5段階 (0～4点) のいずれか一つを選択する。そのうち65項目の質問中58項目が前述の6つの尺度に分類されており、各

尺度ごとに合計得点を算出する。

分析では、得点を平均±1標準偏差を「健常」、±1～2.5標準偏差「他の訴えと合わせ、専門医を受診させるか否かを判断する」、±2.5標準偏差外にあるものを「専門医の受診を考慮する必要あり」の3群に分類した。気分、感情は被験者の属性や置かれている状況に影響を受けるので、結果の解釈は慎重に行う必要がある。

4. Self-Esteem

Self-Esteemは、「自己愛」を意味する用語である。本来 (SE) は、人格の基底部に備わっている筈のものであり、容易に数量化できないが、その一部を様々な尺度によって知ろうとするものである。

「健康な自己愛」の持ち主は、あるがままの自分を受け入れ、それを愛することができるので、自分自身の欠点や限界にも臆することなく直面することができる。また、他人との関係においても、必要以上に気を使ったり、防衛的になったりせず、自分を尊重すると同様に相手のことを尊重することができる。

Rosenberg, M⁷⁾ によるSEの質問紙の日本語版を松下⁸⁾が作成し、その後、星野⁹⁾、菅¹⁰⁾により検証されてきた。ここでは、菅¹¹⁾の方法を用いた。

方法としては、菅の4段階尺度を用い、自尊感情を問う10の質問項目の合計点を得点とした。合計得点の19点以下を低得点群、20～29点を通常得点群、30点以上を高得点群の3群に分けた。

IV. 結果

対象看護学生の年齢は、平均19.1歳で18～36歳の範囲であった。77名中男性1名 (1.3%) でその他はすべて女性であった。結婚している学生は2名 (2.6%) でそのうち子どものいる学生は1名 (1.3%) であった。

A. TAOK

1. 「基本的構え」による割合

TAOKの結果得られた「基本的構え」割合はTable 1に示すように、「自他否定」が最も多く33名 (43.4%)、次いで「自他肯定」の21名 (27.6%)、「自己否定・他者肯定」の12名 (15.8%)、「自己肯定・自己否定」の10名 (13.2%) の順である。OKグラム・パターンをみると、自己否定傾向の学生 (自

己否定・他者肯定の学生と自他否定の学生) が59.2%みられ、他者否定傾向の学生 (自己肯定・他者否定の学生と自他否定の学生) が56.6%みられる。

Table 1 OKグラムの型分類

	Frequency	Percent
自己肯定・他者肯定	21	27.6
自己肯定・他者否定	10	13.2
自己否定・他者肯定	12	15.8
自己否定・他者否定	33	43.4
Total	76	100.0

2. ピーク・エゴグラムの割合

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番高い部分の割合は Figure 1 に示すように、最も多いのはAC優位の33名 (43.2%)、次いでFC優位の22名 (28.9%)、NP優位の9名 (11.8%)、CP優位の8名 (10.5%)、最も少ないのはA優位の5名 (6.6%) である。

3. ボトム・エゴグラムの割合

TAOKの結果得られたエゴグラムの一番低い部分の割合は Figure 2 に示すように、最も多いのはA低位の24名 (31.6%)、次いでCP低位の22名 (28.9%)、NP低位の19名 (25.0%)、最も少ないのはFC低位の1名 (1.3%) である。

4. OKグラムとOKエゴグラムの平均値と標準偏差について

Table 2 に示すように批判する私 (CP) で最も点数の高いのは「自己肯定・他者否定」の56.00、次いで「自他否定」の47.70であった。やさしい私 (NP) で最も点数が高いのは「自他肯定」の52.86、次いで「自己否定・他者肯定」の51.67で、最も低いのは「自他否定」の41.70であった。考える私 (A) で最も高いのは「自己肯定・他者否定」の48.60で、最も低いのは「自他否定」の41.82であった。自由な私 (FC) で最も高いのは「自己肯定・他者否定」の56.60で、最も低いのは「自己否定・他者肯定」の49.50であった。人に合わせる私 (AC) で最も高いのは「自己否定・他者肯定」の59.25で、最も低いのは

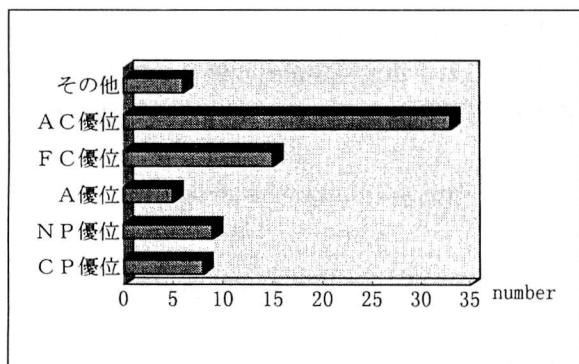


Figure 1 Frequency of Peak Egogram

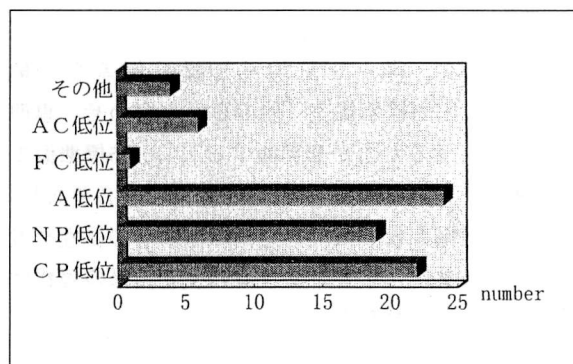


Figure 2 Frequency of Bottom Egogram

は「自己肯定・他者否定」の48.30であった。やさしい私 (NP) と人に合わせる私 (AC) では、「自他肯定」と「自他否定」とに有意差 ($p < 0.001$) がみられた。考える私 (A) は、「自他肯定」と「自他否定」とに有意差 ($p < 0.05$) がみられた。

5. 意志マップの型

意志マップの型で、最も多いのは両方のPが弱い36名 (47.4%) で、NPが強い型とCPが強い型がそれぞれ16名 (21.1%) みられた。

6. 感情マップ

感情マップの型で、最も多いのはACが強い型の29名 (38.2%)、次いでFCの強い型の17名 (22.4%)、両方のCが強い型の16名 (21.1%) であった。

B. YG性格テスト

1. 本学学生のYGテストによる特徴

本学学生の性格傾向を神戸市立看護短期大学および一般学生 (標準化資料) の報告^{1,2)}と比較した。本学学生と神戸市立看護短期大学学生 (以下神戸看護短大学生と略す) と一般学生の3グループの12の

Table 2 OKグラムの型とOKエゴグラムの平均値と標準偏差

	自己肯定・他者肯定 $\bar{x} \pm SD$	自己否定・他者肯定 $\bar{x} \pm SD$	自己肯定・他者否定 $\bar{x} \pm SD$	自己否定・他者否定 $\bar{x} \pm SD$	計 $\bar{x} \pm SD$
批判する私 (CP)	46.10 \pm 8.41	40.67 \pm 9.20	56.00 \pm 10.11	47.70 \pm 10.98	47.24 \pm 10.61
※※※					
やさしい私 (NP)	52.86 \pm 10.88	51.67 \pm 6.71	45.20 \pm 12.10	41.70 \pm 12.91	46.82 \pm 12.36
※					
考える私 (A)	47.86 \pm 8.84	42.08 \pm 9.75	48.60 \pm 8.54	41.82 \pm 8.52	44.42 \pm 9.16
自由な私 (FC)	54.81 \pm 5.07	49.50 \pm 6.88	56.60 \pm 8.40	50.70 \pm 7.61	52.42 \pm 7.32
※※※					
人に合わせる私 (AC)	49.05 \pm 10.11	59.25 \pm 8.97	48.30 \pm 9.88	59.42 \pm 9.98	55.07 \pm 10.98

※ $P < 0.05$ ※※※ $P < 0.001$

性格特性の平均値は、Table 3 および Figure 3 に示すとおりである。Figure 3 から本学学生と神戸看護短大学生は、ほぼ平行関係にあり、類似した性格傾向である。本学学生は、3 群の中では抑うつ性、活動性、のんきさにおいて一般大学生と神戸看護短大学生との中間的位置にある。

2. 3 グループの平均値の差の検定

3 グループの間で有意差のあった項目はTable 3 に示すとおりである。本学学生と一般大学生の間で有意差があった項目は、G、R、T、A、Sで、いずれも本学学生のほうが活動性、のんきさ、思考的外向（非内省性）、支配性、社会的外向性が高かった。

本学学生と神戸看護短大学生を比較すると、情緒安定性を示す抑うつ性と神経質の項目で有意差（ $p<0.05$ ）があり、本学学生の方が抑うつ的で神経質であった。また本学学生の方が協調性は高くない（ $p<0.01$ ）が、攻撃性は低く（ $p<0.05$ ）になっていた。

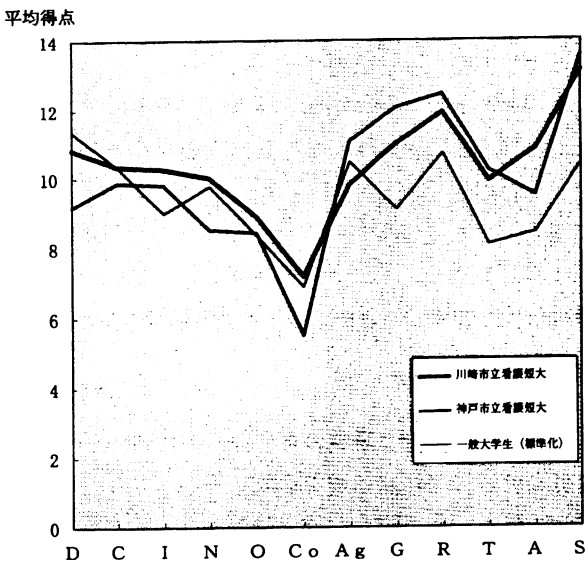


Figure 3 YG性格テスト12特性

Table 3 YG性格テスト12特性の平均値の比較

	川崎市立看護短大		神戸市立看護短大		一般学生 (標準化)	
	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD
高得点—低得点						
D (抑うつ性大—小)	10.82	5.59	9.17	5.34	11.37	5.255
C (気分変化大—小)	10.33	4.63	9.86	4.89	10.33	4.97
I (劣等感強—弱)	10.25	6.01	9.80	4.97	9.00	5.38
N (神経質強—弱)	9.99	5.50	8.51	4.26	9.76	4.86
O (主観的—客観的)	8.89	4.07	8.42	3.91	8.36	4.06
Co (非協調的—協調的)	7.17	4.18	5.51	3.15	6.88	3.81
Ag (攻撃性強—弱)	9.80	3.97	11.07	4.11	10.45	4.20
G (活動性高—低)	10.99	5.41	12.06	4.23	9.10	4.67
R (のんき—のんきでない)	11.92	3.91	12.45	4.15	10.70	5.11
T (内省性低—高)	9.89	4.28	10.20	4.05	8.08	4.53
A (支配的—服従的)	10.82	4.69	9.49	4.63	8.42	5.29
S (社会的外向—内向)	13.12	4.90	13.56	4.33	10.40	5.28
n	76		144		1974	

※ $p<0.05$ ※※ $p<0.01$ ※※※ $p<0.001$

3. YGプロフィール（5類型）による分析

プロフィールをまず典型、準型、亜型の15タイプに分類し、さらにそれらをA型、B型、C型、D型、E型の5類型にまとめた。

本学学生および神戸看護短大学生の各類型の度数分布はTable 4のとおりである。その結果両短大学生とも極めて類似したパターンとなり、B型とD型に集中した双極分布となった。E型について本学学生と神戸看護短大学生との開きが最も大きく、神戸看護短大学生4.9%に比して本学学生は15.8%であった。

Table 4 YGテスト類型の比較

類型	川崎市立看護短大		神戸市立看護短大	
	n	%	n	%
A	11	14.5	28	19.6
B	25	32.9	43	30.1
C	5	6.6	17	11.8
D	23	30.3	48	33.6
E	12	15.8	8	4.9
n	76	100.0	144	100.0

5. 理想の自己像と現実の自己像との比較

1) 12特性の平均点による比較

本学学生の現実の自己像と理想とする自己像の12の特性の平均点をTable 5に示す。その結果、情緒安定、活動的、支配的、外向的なD型を理想の自己としているのがみられる。また、抑うつ性、気分変化、劣等感、神経質、客観性、協調性、活動性、支配性および社会的外向性で、現実と理想の距離に特徴がみられた。攻撃性、のんきさと衝動性および内

省性では現実自己と理想自己との差はみられなかった。

2) YGテストとTAOK「基本的構え」との関連

YGテストの理想自己と現実自己の差、すなわち「I-R差」の指標とTAOKの「基本的構え」の自己肯定との関連をみた。「基本的構え」の自己肯定の指標として「自他肯定」と「自己肯定・他者否定」を合わせて自己肯定者とし、「自己否定・他者肯定」

Table 5 現実自己像と理想自己像12特性平均値の比較

性 格 特 性	現 実 自 己		理 想 自 己		Welchの 差の検定
	\bar{x}	SD	\bar{x}	SD	
高得点——低得点					
D（抑うつ性大——小）	10.82	5.59	1.64	2.85	***
C（気分変化大——小）	10.33	4.63	2.69	2.54	***
I（劣等感強——弱）	10.25	6.01	0.93	1.67	***
N（神経質強——弱）	9.99	5.50	2.14	2.56	***
O（主観的——客観的）	8.89	4.07	4.68	3.11	***
Co（非協調的——協調的）	7.17	4.18	2.99	3.04	***
Ag（攻撃性強——弱）	9.80	3.97	10.74	3.63	
G（活動性高——低）	10.99	5.41	18.18	3.60	***
R（のんき——非のんき）	11.92	3.91	11.04	4.17	
T（内省性低——高）	9.89	4.28	9.92	3.92	
A（支配的——服従的）	10.82	4.69	16.32	3.93	***
S（社会的外向——内向）	13.12	4.90	18.11	3.85	***
n	74				

*** p<0.001

と「自他否定」を自己否定者の指標としてYGテストとTAOKの2つの指標を用いて χ^2 検定を行った。その結果、有意差はみられなかったが、「I-R差」が小さいものほど自己肯定が多く、「I-R差」が大きいものほど自己否定が多い傾向がみられた。

次に、自己受容度と他者肯定の関係についてみた。他者肯定についてはTAOKの「基本的構え」の「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」を合わせて他者肯定者、「自己肯定・他者否定」と「自他否定」を合わせて他者否定者の指標とし、自己受容度の指標として「I-R差」を用いて χ^2 検定を行った。その結果、関連はみられなかった。

3) YGテストとSE尺度の関連

理想自己と現実自己の差が小さい者ほど自己を尊重し、自己評価が高いかどうかを、「I-R差」の大・小群とSE尺度の高・中・低群の2つの指標を用いて χ^2 検定を行った。その結果 Table 6 に示すとおり、「I-R差」の小さい者ほど自尊感情が高く、差が大きい者ほど自尊感情が低いことが示された($p<0.05$)。

C. POMSについて

1. OKグラムとPOMSのT得点の平均値と標準偏差

OKグラムとPOMSのT得点の平均値と標準偏差についてTable 7 に示すとおり、最も得点の平均値が高いのは「自他否定」の「抑うつー落込み」、「怒りー敵意」と「疲労」であった。次に「自己否定・他者肯定」で最も高かったのは「緊張ー不安」と「混乱」であった。「活気」では、「自他肯定」が最も得点が高かった。

「自他肯定」と「自他否定」とは、「緊張ー不安」、

「抑うつー落込み」、「怒りー敵意」、「活気」、「疲労」と「混乱」に有意差($p<0.001$)がみられ、「自他否定」の方がT得点が高かった。「自他肯定」と「自己否定・他者肯定」とでは、「緊張ー不安」、「落込み」と「混乱」とに有意差($p<0.001$)がみられ、「自他否定・自他肯定」の方がT得点が高かった。「活気」では、「自己否定・他者肯定」に比べて「自他肯定」の方が高く有意差($p<0.05$)がみられた。「自己否定・他者肯定」と「自己肯定・他者否定」とでは、「混乱」で有意差($p<0.05$)がみられた。「自己否定・他者肯定」と「自他否定」とでは、「怒りー敵意」、「活気」と「疲労」に有意差($p<0.05$)がみられた。「自己肯定・他者否定」と「自他否定」とでは、「抑うつー落込み」と「活気」とに有意差($p<0.05$)がみられた。

2. OKグラムとPOMS群との関係について

OKグラムとPOMS群との関係について Table 8 に示した。1群は全体に72.4%から86.9%を占めている。2群では「緊張ー不安」と「混乱」が26.3%を占め、その中でも「自他否定」が最も多い。3群でみられたのは、「自他否定」の「抑うつー落込み」「混乱」の各々1名であった。「自他否定」に2群が多く含まれているのが特徴的であった。「基本的構え」と各3群とに有意差($p<0.05$)がみられたのは「疲労」だけであった

D. SE (Self-Esteem)

1. SE (Self-Esteem) の合計平均得点は23.60で、標準偏差は5.88である。Table 9 に示すように、合計得点の19点以下を低得点群、20～29点を通常得点群、30点以上を高得点群の3群とした。1群の平均得点は16.43、2群は24.31、3群は32.21得点で、2群と3群とに有意差($p<0.05$)がみられた。

Table 6 理想自己と現実自己との差と自尊感情との関連

		I-R差		計
		小 (75以下)	大 (76以上)	
自尊感情	低 (19以下)	6	15	21
	中 (20-29)	22	18	40
	高 (30以上)	10	3	13
		38	36	74
$\chi^2=7.978$		df=1	$p<0.05$	

F. 各尺度との関係

1. OKグラムとYGテストとの関係

OKグラムの型とYGテストとの関係について、Table 10 に示した。「自他肯定」者で最も多いのは、D型類型で10名 (47.6%)、「自他否定」で最も多いのは、B型類型の11名 (33.3%) が特徴的であるが、OKグラムの型とYG性格類型とに有意差はみられなかった。

Table 7 OKグラムの型とPOMSのT得点の平均値と標準偏差

N = 76

	自他肯定 n=21 \bar{x} ± SD			自己否定・ 他者肯定 n=12 \bar{x} ± SD			自己肯定・ 他者否定 n=10 \bar{x} ± SD			自他否定 n=33 \bar{x} ± SD		
緊張不安(T-A)	47.19	9.69		58.92	10.13		51.60	11.20		56.42	12.66	
抑うつ落込み(D)	49.05	9.53		55.67	5.14		50.40	8.15		59.73	11.39	
怒り敵意(A-H)	46.05	7.28		47.42	3.90		51.90	12.65		54.55	11.39	
活気(V)	55.81	10.61		49.00	6.82		50.00	10.21		42.52	9.97	
疲労(F)	48.10	8.65		52.17	7.38		57.40	12.33		58.30	8.15	
混乱(C)	50.48	10.02		62.58	6.95		56.40	11.76		61.67	10.20	

※ P<0.05 ※※ P<0.01 ※※※ P<0.001

Table 8 OKグラムの型とPOMS群別表

		n (%)				
群		自他肯定	自他否定 他者肯定	自己肯定 他者否定	自他否定	計
緊張不安 (T-A)	1	20(35.7)	6(10.7)	7(12.5)	23(41.1)	56(73.7)
	2	1(5.0)	4(20.0)	5(25.0)	10(50.0)	20(26.3)
	3	0	0	0	0	0
抑うつ落込み (D)	1	19(29.7)	9(14.1)	12(18.8)	24(37.5)	64(84.2)
	2	2(18.2)	1(9.1)	0	8(72.7)	11(14.5)
	3	0	0	0	7(100.0)	1(1.3)
怒り敵意 (A-H)	1	21(31.8)	8(12.1)	12(18.2)	25(37.9)	66(86.8)
	2	0	2(22.2)	0	7(77.8)	9(11.8)
	3	0	0	0	1(100.0)	1(100.0)
活気 (V)	1	14(22.2)	7(11.1)	11(17.5)	31(49.2)	63(82.9)
	2	5(45.5)	3(27.3)	1(9.1)	2(18.2)	11(14.5)
	3	2(100.0)	0	0	0	2(100.0)
※ 疲労 (F)	1	21(31.8)	7(10.6)	12(18.2)	26(39.4)	66(86.8)
	2	0	3(30.0)	0	7(70.0)	10(13.2)
	3	0	0	0	0	0
混乱 (C)	1	19(34.5)	9(16.4)	8(14.5)	19(34.5)	55(72.4)
	2	2(10.0)	1(5.0)	4(20.0)	13(65.0)	20(26.3)
	3	0	0	0	1(100.0)	1(1.3)

※ p<0.05 Pearson検定

Table 9 Self-Esteemの分類

得点群	n	%
1群 低得点群 (19点以下)	21	27.3
2群 通常得点群 (20～29点)	42	54.5
3群 高得点群 (30点以上)	14	18.2

V. 考察

A. TAOK

1. 「基本的構え」

TAOKの結果、「基本的構え」では自他否定の学生が最も多く、次いで自他肯定の学生であった。自他肯定のグループは、「基本的に信頼感を自分にも他人にも持つことができ、人生の途中で困難や挫折に出会うことがあっても、自他に対する信頼を失わず、やり通せると思うことが可能である」¹³⁾といわれている。自他否定のグループは、自他肯定のグループと逆の状態にあるといえよう。

集団OKグラム・パターンをみると、自己否定傾向の学生と他者否定傾向の学生が約6割弱みられた。自己否定傾向は、力強さに欠けた雰囲気を持っている集団であるので、自信を持つことが必要である。他者否定傾向は、自我状態のマイナス面が表れやすいといわれている¹⁴⁾。中山ら¹⁵⁾は、入学時点と4年生の「基本的構え」は変化すると報告していることから、本学学生の「基本的構え」が変化する可能性があり、自分にも他人にも信頼感を持ち、人生の困難にも立ち向かう能力を持つことが可能と推測できる。今後、「基本的構え」の変化を追跡して、学生が入学年から卒業までにどのように変化するかをみていく必要がある。

2. OKエゴグラム

ピーク・エゴグラムでは、順応した子供の心ACがピークの学生が圧倒的に多く、次いで自由な子供の心FCである。周囲に合わせて気を使いながら行動する学生が非常に多い集団であるが、自由な子供の心FCも比較的高いために、この集団には楽しさや明るさがみられる。ボトム・エゴグラムでは、考える心Aが最も多く、次いで批判的な親の心CPで、やさしい親の心NPで、3つの心は比較的多くみられる。看護学生の入学時点でのピーク・エゴグラムは、や

Table 10 OKグラムの型とYG性格類型

N = 76 n (%)				
YG性格 類型	自他肯定	自己否定 他者肯定	自己肯定 他者否定	自他否定
A	2 (9.5)	3 (25.0)	1 (10.0)	5 (15.2)
B	5 (23.8)	4 (33.3)	5 (50.0)	11 (33.3)
C	1 (4.8)	0	0	4 (12.1)
D	10 (47.6)	2 (16.7)	3 (30.0)	8 (24.2)
E	3 (14.3)	3 (25.0)	1 (10.0)	5 (15.2)
計	21 (100.0)	12 (100.0)	10 (100.0)	33 (100.0)

さしい心のNPが多く、看護職を選択する者にはNPが高い者が多い¹⁶⁾と、いわれているが、本学学生の場合は、最も低かった。看護が科学的・論理的に物事を判断し、仕事を遂行するためにはCPやAもある程度の高さが必要である。中山ら¹⁷⁾や加藤ら¹⁸⁾の結果も看護職を選択する者にはACの割合が最も多いと述べている。ACの自我状態として重要なのは、協調性と順応力であり、看護が他の職種との関係で仕事を遂行するには重要な自我状態である。

B. YGテスト

YGテストの12性格特性の平均値でみると、川崎市立看護短大と神戸市立看護短大の両看護学生は似かよった傾向を示し、一般学生よりも活動的で、のんきであり、あまり内省的でなく支配的で、外向性が高かった。

YGプロフィールの5類型でみても両看護学生は類似しており、B型と、D型に集中する双極分布を示していた。同様に入学後間もなくYGテストを実施した中山ら¹⁹⁾の研究でもYGプロフィールはD型が最も多くなっており、看護を志向する学生の特長として、他者に積極的にかかわっていかうとする姿勢の表れであるといえるかもしれない。

本学学生のE型が15.1%と他大学学生と比較してやや高くなっており、今後このタイプがどのような経過をたどるか追跡する必要がある。

バトラーら²⁰⁾は、経験と自己の一致を適応の指標と考え、Qソート分類法により、治療過程の中で理想の自己像と現実の自己との差が小さくなることを示している。

本研究では、YGテストを用いて理想的自己像と現実的自己像を比較した。12特性の平均点では、情緒安定、活動的、外向的、支配的ないわゆるDタイプが、平均的な理想像として描かれているが、攻撃性、のんかさ、内省性では、理想自己と現実自己像

の間に差はみられなかった。その反面、情緒安定性、客観性、協調性を求め、またより活動的、支配的、外向的であることを望んでいることが示された。

次に、マスロー²¹⁾は、「健康な個人は、自己及び自己の性質に不満を持たず、これを受容することができ、そのことにあまりこだわらない……」と述べている。またロジャース²²⁾は「個人が自己の有機経験を一貫した統合されている体系のうちに受け入れるならば、彼は必然的に人々をよりよく理解し、また自己とは別の人間として、他の人々をよりよく受け入れているのである」と言っている。これらの考えかたを背景に、YGの理想自己と現実自己の乖離とTAOKの自己肯定度および他者肯定度との関連を検討した。その結果、有意な関連はみられなかったが、理想自己と現実自己との距離が小さい者ほど自己肯定的である傾向が伺われる。他者肯定度については、YGの理想と現実自己との差を指標とする自己受容度の間には関連がみられなかった。

次に、YGの理想自己と現実自己の距離と自尊心の尺度（SEスケール）の関連をみると、距離に近い者ほど自分を尊重し、自己評価が高いことが示された。これらの結果から、YGの理想自己と現実自己の差すなわち「I-R差」の値は自己受容の指標としてある程度有効であると思われるが、今後もさらに検討を進めていきたい。

C. POMS

POMSを健常、受診の必要の検討群と受診を考慮する群の3群でみると、健常でない群は、「抑うつ-落込み」と「混乱」とで25%みられ、他は13%

から17%みられている。自他否定のある者が、T得点が高い。POMSは、過去1週間の気分プロフィール尺度であり、検査時期が前期の最終日で、次週から1週間定期試験という状況で実施したことから、少しその影響がでているのではないかと推測される。「基本的構え」で自他否定する者が、全体に気分の不安定が生じることが予測できる。

D. Self-Esteem

通常得点群が最も多くみられ、次いで低得点群である。一般の学生^{23) 24)}のSelf-Esteemと比較すると本学学生は低得点が多くみられている。これは、あるがままの自分を受け入れ、それを愛することがまだ十分できない状況にあると推測される。さらに、他人との関係において必要以上に気を使ったり、防衛的になり、自分を尊重すると同じように相手のことを尊重することが、まだできないということは、現在青年期にあり、自らのアイデンティティーを確立する段階にあるためと推測される。本学に入学した学生が、Self-Esteemの低得点が多いという特徴であるのか、今後も調査していく必要がある。

VI. 今後の課題

本研究の結果は、1995年度入学生の入学4ヶ月後に調査し、対象数が少ない資料から得られた結果であるため、今後引き続き調査を積み重ねて分析していきたいと考えている。自己の性格特性-心の健康状態を理解し、看護職者として、人間としての自己成長のための気づきが得られる教育環境づくりができるようにしたいと考えている。

引用文献

- 1) 水野正憲, 杉田峰康: OKエゴグラムによる自己理解 - 自我状態と基本的構えの総合的理解 -, 交流分析研究, Vol.9, No.1・2, 35-42, 1984.
- 2) 杉田峰康他: TAOK活用手引, 適性研究センター, 1980.
- 3) 八木俊夫: YGテストの実務手引き - 人事管理における性格検査の活用 -, 日本心理技術研究所, 1992.
- 4) Rogers, C.R: A Theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. Part II. In Koch, S. (ed.) Psychology: A study of a science. McGraw-Hill, 1959.
- 5) 上田吉一: 人間の完成-マスロー心理学研究, 誠信書房, 111, 1988.
- 6) 横山和仁, 荒記俊一: 日本版 POMS手引, 金子書房, 1994.
- 7) Rosenberg, M: Society and the adolescent self-image. Princeton: Princeton Univ. Press, 1965.
- 8) 松下 覚: Self-image の研究-Self-esteem scale の作成-, 日本教育心理学会第11回総会発表論文集, 280-281, 1969.
- 9) 星野 命: 感情の心理と教育(2), 児童心理, 24, 1445-1477, 1970.

- 10) 菅佐和子：SE (Self-Esteem) について, 看護研究, 17(2), 21-27, 1984.
- 11) 菅佐和子：前掲書
- 12) 大沢正子：看護学生のパーソナリティの特徴, 神戸市立看護短期大学紀要 創刊号, 131-140, 1982.
- 13) 中山久子, 飯田澄美子：単科大学における看護学生の健康管理に関する研究, 聖路加看護大学紀要, 19, 25-36, 1993.
- 14) 新里里春, 水野正憲他：交流分析とエゴグラム, チーム医療, 1994.
- 15) 中山久子, 飯田澄美子：前掲書
- 16) 加藤美砂他：エゴグラムによる看護学生の自我状態の一考察, クリニカルスタディ, 35-38, 1988.
- 17) 中山久子, 飯田澄美子：前掲書
- 18) 加藤美砂他：前掲書
- 19) 中山久子, 飯田澄美子：前掲書
- 20) John M. Butler. Gerard V. Haigh：PSYCHOTHERAPY AND PERSONALITY CHANGE, PART1・2 and 4, University of Chicago Press. U.S.A., 1957. /伊東博訳：クライエント中心療法による自己概念と理想概念との関係の転換, 69-96, /友田不二男監修, 人格転換の心理, 岩崎書店, 1961.
- 21) 上田吉一：前掲書
- 22) 波多野誼余夫：ロジャースの自己理論, 詫摩武俊編 性格の理論, 誠信書房, 1967.
- 23) 菅佐和子, 大原 貢：精神科受診者の Self-Esteem についての実証的研究, 愛知医科大学医学会雑誌, 10, 1, 29-35, 1982.
- 24) 菅佐和子：大学生の Self-Esteem についての実証的研究(2), 愛知医科大学医学会雑誌, 8, 2, 141-147, 1980.

参考文献

- 1) 緒方美智子, 多田昭栄：エゴグラムによる看護学生の自我状態の観察, 日本看護学会看護教育 第15回, 132-135, 1984.
- 2) 伊東博訳：パーソナリティ理論, 岩崎学術出版, 142, 1973.

A Basic Research on Nursing College Students' Personality Traits

Kimiko KASHIRO Motoi OE Yasuko JINDA Teruko KUNIOKA Masahiro ISAWA
Kimie SHIBAHARA Humio TAKEUCHI Seiji MITA Yasuko AOKI

Department of Nursing, Kawasaki City College of Nursing

Abstract

We conducted personality tests on our nursing students four months after their entrance to our college to grasp their group characteristics by using Transactional Analysis and OK Positions, Yatabe Guilford Personality Test, Profile of Mood States and Self-Esteem approaches. We analyzed and compared the data of each test.

The findings are as follows;

1. As to "basic attitude", 43.4 percent of them were I'm Not OK-You're Not OK, 27.6 percent were I'm OK-You're OK. And 40.8 percent of them were I'm OK and 59.2 percent I'm Not OK.
2. Their peak egograms showed the highest AC-predominance and the second highest CP-predominance. In their bottom egograms, most frequent A-trough and the second most frequent CP-trough were found.
3. As to the relation of "basic attitude" with egograms, those who were I'm OK-You're OK and I'm Not OK-You're Not OK showed a similar pattern.
4. The data of the Yatabe Guilford test showed a bimodal distribution of B-type and D-type, with the C-type being the fewest.
5. The students with the smaller gap between the ideal and real self-image of themselves tended to accept and respect themselves more smoothly.
6. Concerning the relation between the "basic attitude" and Profile of Mood States, those who were I'm Not OK-You're Not OK had the highest T-scores in depression-discouragement, anger-hostility and fatigue.
7. In self-esteem scoring, the average-score group accounted for 55 percent of the total, the low-score groups represented 27 percent and high-score groups 18 percent respectively.

Key words:

Transactional Analysis

Yatabe Guilford Personality Test

Profile of Mood States

Self-Esteem

Self-Growth